

「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。」これは色紙に書かれるのがいちばん多い聖書のことばかもしれません。それぞれの節を漢字四文字で「常時喜悅、不断祈禱、万事感謝」と書かれているのをよく見かけます。この有名なみことばを2020年の教会の指針聖句とし、指針を「喜びと感謝をもって主に仕える」としたいと思います。有名なみことばですが今一度、このみことばの意味について学びたいと思います。

はじめに「喜び」について考えてみましょう。「いつも喜んでいなさい。」このことばは、どんなことを教えているのでしょうか。それは、悲しんだり、憂えたり、怒ったりしてはいけないということを行っているのでしょうか。そうではありません。聖書は、自分の罪に悲しみ、社会の悪を憂い、正義が踏みにじられるときに怒るべきことを教えています。むしろ怒るべき時に怒れないことの方が問題でしょう。悲しみは辛い感情で癒えてくるまで時間がかかりますがそういう体験をした人の方が人に優しくなれたり、ことばに重みがあるとはよく言われることですね。「喜怒哀楽」の感情は神から与えられたもので、それぞれに意味があり、役割があります。「いつも喜んでいなさい」というのは、何があってもニコニコしていれば良いといったことではありません。それは、喜びを人生の基盤にするということを教えています。悲しみ、憂い、怒ることがあったとしても、というよりも誰であっても普通に経験することですが、悲しみに沈んでしまわない、憂いにふさがれてしまわない、怒りに支配されてしまわない、むしろ、悲しみも、憂いも、怒りも、最終的には喜びに変えられていくということが「いつも喜んでいなさい」という意味です。神が与えてくださる喜びの上に人生を築くなら、悲しみは後悔で終わらず、憂いは失望で終わらず、怒りは罪に導くものにはならないのです。ちなみに喜びと楽しいは違います。「楽しい」とは一時的あるいは刹那的です。「何か楽しいことはない？」があいさつの第一声になっている人が時々おられますがいつも楽しいことばかり探し歩いているとしたらその人の心の内側は空しいだろうと思います。そういう方の場合、辛く苦しい経験をされた方が少しは楽しくなってくると思います。しかし最も良いのは神が与えて下さる喜びの上に人生を築くということです。

では、神がくださる喜びとは何でしょうか。それは第一に、救いの喜びです。主イエスが七十人の弟子たちに悪霊を追い出し、病気をいやす権威を与えて伝道に送り出したときのことで、弟子たちは、伝道を終えて喜んで帰って来たとき、興奮して言いました。「主よ。あなたの御名を使うと、悪霊どもでさえ、私たちに服従します。」しかし、主イエスは弟子たちにこう言われました。「悪霊どもがあなたがたに服従するからといって、喜んでではありません。ただあなたがたの名が天に書きしるされていることを喜びなさい。」(ルカ 10:17-20) 悪霊を追い出し、病気をいやす力、それは福音をあかしするために与えられたものでした。しかし、福音はいつでもそのような奇跡的なことによってあかしされるとは限りません。多くの場合、福音は、クリスチャンの日常の生活を通してあかしされます。神の奇跡的な力が何も現われなところか、クリスチャンがまったく弱い者として苦しめられることもあります。迫害や殉教などがそうです。初代のクリスチャンは、社会から締め出され、財産を奪われ、いのちさえも奪われました。社会に対して良い証しをするといったようなことは口にできないほど至るところで無力さを味合わなければならなかったのです。しかし、クリスチャンは、内側に与えられた救いの喜びによって迫害に耐え、その喜びによって福音をあかししたのです。テサロニケのクリスチャンたちもそうでした。テサロニケのクリスチャンは信仰に反対する人々に囲まれていました。しかし、その困難や苦しみは信仰の妨げになりませんでした。1:6に「あなたがたも、多くの苦難の中で、聖霊による喜びをもってみことばを受け入れ、

私たちと主とにならう者になりました」とあるように、たましいの内側に、消えることのない喜び、救いの喜びを持っていたからです。

私たちの人生にはかならず、アップ・ダウンがあります。笑う時もあれば、泣く時もあります。たましいの奥深くに、救いの喜びがなければ、状況に振り回されてしまいます。しかし、信仰の錨をイエス・キリストの救いの喜びに下ろすなら、どんなにアップ・ダウンがあっても、流されることはありません。救いの喜びが、私たちを支えてくれるのです。「いつも喜んでいなさい」とは、イエス・キリストの救いを信仰によって受け入れなさい。その喜びを人生の基盤としなさい。その基盤に信仰の錨を下ろしなさいということを教えています。

次に「祈り」について考えてみましょう。「絶えず祈りなさい。」このことばも、朝から晩まで、何もしないで祈ってさえいれば良いということを言っているわけではありません。多くの時間を祈りに費やすことができたなら、それは素晴らしいことです。「祈りはクリスチャンの呼吸である」と言われますが、十分に、深く祈らないなら、それは浅い呼吸と同じで、すぐに息苦しくなってきます。私たちには、もっと祈りのために時間を割く必要があると思います。それによって神の恵みを十分に吸収したいと思います。しかし、「絶えず祈る」ということが 24 時間のすべてを祈りに費やすということだとしたら、どんなに時間をとって、誰もそれを守ることはできません。「絶えず祈る」というのは、時間的なことだけを行っているのではなく、祈りで始めた一日を、祈りによって過ごすということを意味しています。一日を祈りで満たす、祈りが生活になる、生活の営みが祈りになるということです。

そのような祈りによって、私たちは感謝に導かれていきます。感謝のみなものは「喜び」ですが、もし、祈りがなければ、神が与えてくださっている喜びを発見することができません。熱心に祈り求めていればこそ、求めていたものが与えられたとき、それが神がしてくださったことが分かり、そこから感謝が生まれるのです。祈りがなければ、神が良いものを与えてくださっていても、偶然、物事がうまくいったと思うだけで、神の恵みが見えず、感謝も生まれません。また、「祈り」には「願い」だけでなく、神のみわざや神のことばを深く思い見る、「瞑想の祈り」と呼ばれるものも含まれています。そのような祈りを積み重ねていると、人生に洞察が与えられ、人からみて、とても感謝なこととは思えないことも、感謝することができるようになります。

「絶えず祈る」、祈りの中に生きるとき、逆境の中に恵みを見出し、それを喜び、感謝することができるようになります。「喜び」と「祈り」と「感謝」の三つはしっかり結びついていて、決して分けることができません。とりわけ「祈り」は「喜び」と「感謝」をつなげるものです。真剣に祈る人が、主にある深い喜びを味わい、こころからの感謝をささげることができるのです。人生に喜びを発見するために、感謝の生活に導かれるために、さらに真実な祈りを学び、それに励みたいと思います。

最後に「感謝」そのものについて学びます。聖書は「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい」と言ったあと、「これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです」(18 節)と書き加えています。「これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです」というのは、直訳すれば、「これが、キリスト・イエスにある、あなたがたへの神のみこころです」となります。「これは神のみこころである」というのは、とても強いことばで、ここに宣べられていることはしっかりと受け止められるべきこと、決してないがしろにしてはならない大切なことであることを表わしています。

実際、パウロはこの 5 章を通じてキリストの使徒として権威をもって、厳かな勧めを与えています。

ここには、教会の指導者たちを敬うこと（12-13節）、すべての人々を敬うこと（14-15節）、聖霊とその賜物を敬うこと（19-22節）が教えられています。では、16-18節は何を敬うことを教えているのでしょうか。それは、神とイエス・キリストを敬うことです。「いつも喜び、絶えず祈り、すべての事について、感謝する」というのは、そうしていれば、気分がいいから、語呂も良いし元気づけられるからといった処世訓ではありません。聖書が教える「感謝」は、なんとなく、しあわせな気分ひたるといったものでもありません。それは、神のみこころを喜ばせ、キリストに従う道です。私たちが感謝の心を持つのはそれによって自分を喜ばせるためではなく、それによって神を喜ばせるためです。ほんとうの感謝は神に向かって献げられるものなのです。

使徒パウロは、「私はイエス・キリストによって私の神に感謝します」「神に感謝します」「私は、私を強くしてくださる私たちの主キリスト・イエスに感謝をささげています」「私は、祈りのうちにあなたのことを覚え、いつも私の神に感謝しています」などと、さまざまな手紙に書いています。テサロニケ人への手紙でも、パウロは 1:2 や 2:13 で「私たちは、いつもあなたがたすべてのために神に感謝しています。」

(1:2)「私たちとしてもまた、絶えず神に感謝しています。」(2:13)「私たちのこのすべての喜びのために、神にどんな感謝をささげたらよいでしょう」(3:9)と書いています。つまり「感謝します」だけでは、感謝の意味がなくなってしまう。「神に」が大切なのです。私が嬉しい気持ちになったから、感謝しますというわけではありません。救いの喜びを味わった時に、聖霊の働きを感じて喜びが起こってきた時にそれを誰かに伝えることも大切ですが何よりもまず神様に感謝を捧げることが大切なのです。

テサロニケのクリスチャンは苦難の中でも救いの喜びを失いませんでした。そのようなテサロニケのクリスチャンのゆえに、パウロは神に感謝をささげました。喜びは感謝のみなもとです。イエス・キリストにある喜びを保ちましょう。そして、大きな感謝を神にささげましょう。

喜び、祈り、感謝について学んできました。今年の指針は「喜びと感謝をもって主に仕える」です。主に仕えるとは主に何を捧げて生きるかということであり、別の言い方をすれば神様のために何を犠牲にして生きるかということです。しかも神様のために何かを犠牲にすることが喜びであり感謝だと言うのです。これは少し世のため人のために良いことをしておこうかといった気持ちではついてゆくことは出来ません。神様がどのようなお方であるのか、主イエス・キリストは私のために何をしてくださったのかじっくりと考えなければ何も出来ないと思います。さらに救いの喜び、聖霊が働かれる喜びを味わいたいと思います。絶えず祈りながら喜びが感謝に変えられてゆくことを待ち望みたいと思います。そして自分がどのような時でもただ神への感謝、神が喜んで下さる感謝を捧げ続けてゆきたいと思います。